

なだいなだ

# 娘の学校



娘の学校

中公文庫

©1973

昭和四十八年九月 十日初版  
昭和五十二年三月二十五日七版

著 者 なだいなだ

発行者 高 梨 茂

用紙 本州製紙  
整版印刷 三晃印刷  
製本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒  
104

東京都中央区京橋二丁目一番地  
振替東京二一三四

定価はカバーに表示してあります

中公文庫

# 娘の学校

なだいなだ著



中興公論社

挿画・カット 柳生弦一郎  
表紙・扉 白井晟一

## 目次

校長訓示

調子はずれ音楽教室

指導にならないと言われそうな読書教室

作家になることを思いとどまらすための文学教室

若者と年寄りのための政治教室

憂いを増させるための人生論教室

穴居人的心情を求めての人類学教室

ヒューマニズムと非条理の教室

ニキビと落書きの教室

156 137 117 99 79 61 45 24 7

観念的な性教育教室

ノーベル賞のことわり方を考える作家教室

健康を鼻にかけさせぬための狂気論教室

あとがき

# 娘の学校



## 【校長訓示】

世界は大きな学校であり、東大などというちっぽけな学校とは、くらべものにならぬ大きさの学校である。

四人の娘ども、私は、これから、お前たちの校長を勝手に名乗ることにする。お前たちは、生まれた時から、この学校に入学した。世界という大きな学校である。私は校長のつもりであるが、お前たちは、はじめっから、私をいじわるな上級生ぐらいにしか思っておらぬであらう。しかし、そんなことは、どうでもいい。

デカルトは、『方法序説』という本の中でこう言っている。

……世界という大きな本……旅をすること、冒険的航海や遠征の軍を見ること、異なった風俗や条件の中で生きる人々をたずねること、いろいろな経験をつむこと、運命に身をゆだね、自分自身を試練にかけること……。



そう、私は、ほかならぬ、この世界という大きな本を教室とも教科書ともして、お前たちを教えて行くつもりである。

この学校では、いいことも、悪いことも教えられるであろう。校長としての私は、特別悪いことを教えようと思っっているのではないが、生徒はけしからんことに、学校で、先生の教えないことを学んでしまうものだからである。だから、悪い生徒が出来ても、全部が校長の責任ではない。

三女の千夏は、今、六歳であるが、学校にはじめて行った日、帰って来ると、「今日、学校で何を習って来た」とたずねた私に言ったものである。

「おい、お前さん、今、何てったの」

れっきとした父親の私をつかまえて、目玉をぐりつとまるくして、そう言ったのだ。

「こら、何だ、父親をつかまえて、お前さんとは」

私は叱った。

「お前さんじゃ気にいらぬか。じゃ、おとつつあん」

何たることであろう。学校で最初におぼえたのが、こんなわるふざけであるとは。

だが、千夏は、学校で先生からこんなことを教わったのではない。いたずらっ子の同級生から教わったのである。先生に責任はない。私は、世の教育ママたちのように、「学校は、いったい何を教えてるんでしょ」などと、学校を責めたりしない。学校とは、そういうところでもある

と知っているからである。私自身、小さい時、手におえぬいたずらをして、両親に、

「いったい、学校で何を教わってるのだ」

と何度も叱られたものだ。そのたびに、私は、先生や学校を弁護したい気持ちになったものだ。わざわざ月謝を払って行かせる学校ですら、こうなのだ。私の、この月謝も不要な学校で、子供たちが、勝手につまらぬことをおぼえたとしても、校長としては、責任をとるつもりはない。そもそも、子供の行動の責任を、学校にばかり押しつけるところが、日本には多すぎる。つい、しばらく前のことであったが、東大生と慶大生が金庫ドロボーをしてつかまった。すると、新聞には、「大学教育に欠陥がある」というような談話が、いくつものせられた。私は、そうした談話を耳にすると、やれやれ困ったものだと思う。

大学は、物をとるな、人を殺すな、などということをお教えるところではない。そもそも、大学まで行かねば、物をとるな、人を殺すな、ということが、わからないようでも困るではないか。そういうことは、学校で習うことではない。それらは、社会の掟であり、社会が教えこんで行かねばならぬものだ。家庭でのしつけも大切だが、それだけでも足りぬ。

末っ子の美樹は、まだ二歳にならない。この末娘が、ある日、突然に、理由もなく、何もしておらぬ私を、ものさしで、ポカポカとなぐりはじめた。いったい、何事であろうか、と思ったが、それは、あのテレビという、いまいまいましいものの影響なのであった。

エンタープライズ号の佐世保寄港で、三派系全学連と、警察機動隊とが衝突した。毎日、ニ

ースのたびごとに、その光景がうつし出された。私は、その時、ある週刊誌にたのまれて、佐世保に取材に行っていた。私の姿が、やじ馬の間にまじって、テレビ画面に現われはしないか、という期待もあって、留守の家人たちは、ニュースというニュースの時間にテレビをつけたのだった。その結果、美樹は、警棒を持って、やったらめったらに、相手かまわずポカポカとなぐる警官を、まねするようになった。もちろん、美樹は、三派系の全学連もまねた。部屋中を、ワッショイ、ワッショイと叫んで、ジグザグに走りまわり、素手で、突然、私にぶつかって来たりするのだ。

困ったことである。これで、家庭のしつけが悪いなどと言われるのでは、やりきれぬではないか。

上の三人の娘たちも、テレビを見ていた。家人の報告によると、十歳、八歳、六歳の上の三人の娘は、テレビの前で、

「学生、ガンバレ、おまわりさん負けろ」

と三派系の学生の応援団になったらしい。しかし、決して、わが家では、偏向教育などしていいのである。何か、子供に悪い点があると、すぐ学校や先生や家庭の責任を問題にすることが、いかに無意味であることか、これでわかったであらう。

私が校長であるこの娘の学校を、お前たち娘たちが卒業することは、ないだろうが、卒業せぬまでも、生徒の行為について、すべての責任を持つことなど、とうてい出来ないのである。

その点では、政治家も、学校だけの責任のような顔をしてもらわないようにお願いする。総理大臣が、「小骨一本も抜かせません」などと言って、小骨どころか魚まですてていて、小学生のウソが、どうしてもがめられよう。ウソを平気で言い、汚職を平気でする政治家が、「テレビの俗悪番組が、青少年に悪影響を与えている」などと叱るのは、どう考えても、無責任なことである。

私は、今、校長として、仕方なく訓示をたれているのであるが、お前たち生徒が、そろそろ飽きはじめているのがわかる。それに、本当は訓示をたれるなど、がらにもないことなのだ。だから、そろそろ訓示はおしまいにするが、その前に一つだけ、話しておくことにする。

それは、私のヒゲのことである。

私は、しばらく前から、ヒゲをのばした。お前たちにとっては、私がこう書いても、別に不思議に思われぬであろう。しかし、私は校長として、教えねばならぬことがある。それは、この「ヒゲをのばす」という日本語的表現である。お前たちの知っているフランス語では、同じ場合に、「レッセ・ブッセ」つまり、「のびるにまかせた」と言う。こちらの方が論理的である。のばそうと思っても、本当は、自分の自由にならない。自由に出来ることは、剃ることの方である。少し文法の話になって悪いが、日本語の表現「ヒゲをのばす」では「のばす」は他動詞であり、ヒゲは目的補語である。主語は私である。かくして、ヒゲは、主語の意のままになるものと考え

られがちだ。

私は、私の顔をヒゲつきのものとしてからというもの、会う人々に、

「いったい、どうして、どんな理由で、ヒゲをおのばしになったのですか」

という質問を浴びせられて困惑したのであった。正直に言うと、夏休みの間、ちょっと不精をして、ヒゲを剃らなかつたのだ。すると、ヒゲをのびるにまかせたら、自分の顔は、どんなに見えるであろうか、という興味が湧いた。

これは、人間の生まれながらにして持つ、変装本能というものが、なせるわざである。誰でも、もし変化出来るのなら、姿を変えてみたい気持を持っている。床屋や美容院が、人間の社会で繁盛するのは、その本能に支えられているためである。この変装という行為は、人間の歴史の中でも、小説や物語の主題となって、手を変え、品を変えて繰返されて来た。童話や伝説を読むと、魔女によって動物に変えられた話が、何と多いことかに、驚くことだろう。そこには、変りたいという願いと、変ることに對する不安が、いりまじっているのだ。推理小説の中でも、名探偵や名ドロボー（名ドロボーというのは、ちょっと変だが）は、この変装の術を、飽きもせず使っている。この飽きもせず、というのが、大切なところだ。

だが、出発点はそうだったが、それから、いろいろな要素が加わった。お前たち娘どもは、ヒゲがのびて、変な顔になった私を見て、

「パパ、ヒゲ剃らないでえ」



と言うようになった。

かくして、私には、今度は、ヒゲを剃る自由が、なくなったのである。実のところは、そうなのであった。だが、人々は、私に、かくさずに、本当の理由を言えとせまった。それ故、私は、それらの質問者を納得させるために、もっともらしい理由を、あれこれ考え出さねばならなかった。これは、大変に難しいことなのである。

なかには、驚くほど勘のいい人がいて、  
「私には、わかっていきますよ。あなたが、なぜ、ヒゲをのばしたんだか。ズバリ、当ててあげましょうか」

と言った。そして、意味ありげに、ニヤニヤ、あるいは、エヘラエヘ笑うのであった。それは、私を気味悪くさせた。私が、まだ考えついていない理由を、他人があててしまうなんて、タイムマシンで、未来と過去を自由に行き来する人間でなければ、出

来ない筈ではないか。

それらの人々は、私に何か願ひごとがあるにちがいないことにしたし、また、私の細君、つまり、お前たち娘どもの母親の、要求によるものだとした。たしかに、フランスには、

接吻する男にヒゲなきは、チーズなき食事のごとし。

という格言がある。だが、正直に告白すると、私の鼻の下の毛は濃く、しかも、どういふことか、あらゆる方向に無統制にのびること、まさに、戦後の日本社会の縮図のごとくであった。しかも、けしからぬことに、その中のあるものは、重力の法則に従ふこともせず、無政府主義者のごとくに、なんと上向きにのびていた。そして、手で、くしで、なでようと、なでつけようと、手や、くしが離れるとたんに、ピンともどもどるのであった。それ故、顔を寄せ、近づくと、それらの反逆者たちは、相手の鼻のあなの中に侵入して、くしゃみをよびおこすのである。かくして、私の細君は、嘆息して、

「これは、チーズなき食事でなくて、コシヨウを入れすぎた食事のごとしだわ」

と、祖国の祖先たちの作った格言を訂正しなければならなかった。

そのようなわけで、私は、いろいろ、考えられる理由を探した。

「最近、女性は、なんでも、男をまねするようになりましたのでねえ。ズボンをはく。髪は短く

する。仕事の面でも、男のやれることを何でもやるようになる。酔っぱらって、くだをまいたり、たんかをきいたりするところまで、男そっくりの女性が、現われるようになりました。

ところからです。私は、くやしくても、女にどうしても、まねの出来ぬことは、何だろうか、と考えたのです。それが、このヒゲです。くやしくったって、これを女性がまねることは出来んでしょう。どうです。やれますか」

私は、そう言って胸をはったこともあった。

長女の由希は、私と猫の顔を見くらべて、

「パパ。パパのヒゲは、猫のヒゲみたいに、横にのびるのねえ」

と、いささか侮蔑的なことをのべたことがあったが、私は、その時も平然としていることが出来た。

「馬鹿。くやしかったら、どんなヒゲでもいい、のばしてみろ」

私は、そう言うことが出来たからである。これには、わが家の女族どもは、困ったらしかった。「そもそも、男って、ヒゲなんか生えるなんて、ネコなみねえ」

などと、反撃の姿勢を示すことがあったが、それは負けおしみを出ぬことがわかっていたので、私は、それを聞いても、泰然自若、ニタリとするだけであった。

しかし、その理由を聞くと、日本語の感覚に鈍い人があって、